

52 中国伝統医学と道教 (XVII) 『三国演義』

から

吉 元 昭 治

本学会において、すでに『金瓶梅』『紅樓夢』および『西遊記』について発表したのが、今回は『三国演義』についてのべておきたい。

『三国演義』は、正史『三国志』（晋、陳寿、一三三—二九七年）をもとはしているが、全く別なものである。演義とは、ノンフィクションの歴史を、フィクションにまとめあげた、いつてみれば物語りといったようなものである。

現在、我々が一般に『三国志』といっているのは、正史のそれではなく、『三国演義』または『三国志演義』といわれるものである。この『三国演義』にも、時代的変遷がある。まず、宋代、街の講師師（説話人）により原形が語られていたらしく、その中には「説三分」という、

三国志を専門とするものがいた。元代になると、『全相三国志平話』（至治年間、一三二—一三三年）があらわれた。

この全相とは絵入のことで、上段が絵、下段が物語りとなっている。ついで、元代になると、羅貫中（太原の人、元来、明初の人というだけで生年、没年不明）が、『三国志』『資治通鑑』などをもととして、内容を歴史的事実に近いづけ、一大大河小説、叙事詩につくりあげた。その名を『三国志通俗演義』という、羅貫中は『水滸伝』にも係わりをもっている。この最も古いものが、弘治本（一四九四年）で、その後長く世に出ていたが、清代になると、『李卓吾先生批評三国志』（李卓吾、一五二七—一六〇二年）がでた。これは『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』のいわゆる四大小説と同じスタイルに組み代えたものである。さらに、清代初め、毛宗嵐が、いわゆる「毛本」という、従来の二百四十節を百二十回本としたものを、康熙十八年（一六七九年）に発刊した。これが現在よく目にする『三国志』である。

さて、物語りは、道教の初まりとされる、黄巾の乱から筆をおこしている。その領袖、張角が、南華老仙とい

う老人から『太平要術』という天書三巻をえたというのが発端となっている。実際には、『太平清領書』で、物語りにもでてくる于吉より伝わり伝わって張角の手に入る。この張角は、反乱をおこし、これに対応すべく、時の朝廷の命に立ちあがったのは、後に蜀に據って天下をうかがうことになる劉備である。彼は関羽、張飛と桃園で義兄弟の盟をむすび活躍する。そうして、諸葛孔明という類まれな軍師を迎え、曹操の魏、孫権の呉と三国鼎立の虚々実々の戦いをする。しかし、関羽・張飛の死、ついで劉備までも亡り、孔明の努力も空しく、孔明も最期を、秋風寒し五丈原で迎える。やがて魏の後を襲った、司馬炎により、蜀も呉も集約され晋という時代になる。物語りはこの間の後漢の終り二二〇年から、魏の滅亡、晋の成立二六五年のほぼ四十五年の物語りとなっている。

『三国演義』の内容は、たんに小説として読まれているだけでなく、年画・版画や、京劇にも登場して、人々は「判官びいき」で曹操や孫権は憎まれ役となっている。

「桃園の盟い」「連環の計」「三顧の礼」「長坂坡の戦い」

「赤壁の戦い」「回荊州」「出師の表」「空城の計」「五丈原」「死せる孔明、生ける仲達を走らす」などは、見る人をして血湧き肉躍り、時に熱涙をしほらすのである。その他、登場人物として、吉平、華佗といった医師、于吉や左慈という道教的な人物がでてくる。特筆してよいのは、孔明で、文中の彼の服装や、年画や版画の絵、京劇での衣裳からいって全く道士のスタイルであることである。彼は遁甲・天文にすぐれ、戦いの勝敗を予測し、また自己の運命、残された蜀の命運をも占っているのである。また関羽は孫権により殺されるが（五十八才）、最後まで、信義を全うしたので、武の神、信義の神、ついには万能の神として、現在も「関帝廟」の主神となっている。清代、順治帝は、「忠義神武靈佑仁勇威顯護國保民精誠綏靖翊贊宣德關聖大帝」と追贈している。総会ではこれらをふまえて発表する。

(順天堂大学医学部婦人科教室)